主陣地なるや警戒陣地なるや、陣地の強度、障碍物の有無、側防機能、配備の概要、攻撃の爲地形判斷

4. 將校斥候沈着勇敢に敵陣地の外壕を偵察せし戰例

大正三年青島戰役歩五五の第五中隊の一小隊長は十月二日夜北堡壘の外壕偵察を命ぜられ長以下十五名外に工兵將校一名兵一計十七名と共に夜暗を利用し出發す。

漸く目的地附近に達し敵の妨害を避けつゝ苦心して其目的の一部を達成せしも斥候長は尙ほ單身敵陣地に肉迫し偵察せんとし軍曹一、上等兵一のみを同行し他は全部工兵將校に委任して我陣地に歸らしめたり。

工兵將校は十數名の兵を引率して歸還する行動適切ならざりしため我歩哨は敵の來襲と誤り我陣地にある守備兵悉く其線につき一部射擊を開始する等の醜態を演出せりこれは速に我歩哨線と連絡せざりし爲と突然暗中に歩哨線前に現出したる等要するに周到なる注意を缺きしためなりしならん。

これに反し將校斥候長以下の三名は勇敢にも敵堡壘の直前にある壕底に潛

入し其幅、深さ、兩岸の傾斜、側防關係等を至細に踏査し敵の射擊を受けつゝ數時間に互り偵察し悠々我歩哨線の翼に廻りて出發地點に歸還せり。

5. 下士斥候

將校斥候を出す程度にあらざる場合に搜索機關として大いに活用せらるゝものにして從つて其方法は概ね前述將校斥候に準ずべきものなれ共將來戰を想へば將校の不足は自然下士斥候が搜索の大部を負擔すべきものなるを以て自己能力の最大を發揮して國軍の爲其責務の遂行を全うせざるべからざる緊要缺くべからざる事を銘肝すべきものとす。

6. 下士斥候の責任ある行動將校に優りし戰例

明治三八年二月二十六日卽ち奉天會戰の初期一戸支隊の歩兵第三五聯隊の某大隊長は前進に當り部下一將校をして疎林の一丘阜に敵兵の有無を搜索せしめしに敵部隊有りとの報告をなす。

同日午後同目的の爲某中隊の優秀なる某軍曹は下士斥候として同地に部下四名と共に派遣せられ勇躍して丘阜前約六百米に達す此時樹間に敵監視兵

らしきもの三名を發見す乃ち一部をして射擊準備を命じ斥候長は匍匐して前進近接せしに監視兵毫も動かず不思議に思ひ諦視すれば之三個の墓標なり軍曹は尙も地形地物を利用して接近丘阜に到達せしに全く敵を見ず只敵の在りし痕跡のみなりき之ぞ要務令の斥候は其長の選拔により成果の期待の大なるを敎へし所以なり。

7. 晝間敵陣地搜索の一例

イ、任務の了解　全般の情況をよく了解し其報告は時機に適合する如く特に注意すること

ロ、搜索計畫　地圖と現地を對照し自己の任務を基礎とし搜索計畫を立案す（具體事項は前述將校斥候の條に概ね同じ）

ハ、出發準備　斥候兵の選拔、任務の傳達、斥候長計畫の概要を指示す。武裝の點檢、記號、傳令使用順序の概定、裝塡携行品（地圖、時計、雙眼鏡、報告材料、磁石、糧食、彈藥）の整備

二　行進間の要領

進路、敵に近接したる場合、敵に發見せられたる場合

部落名、著明の目標、主力部隊の行動、傳令の道路指示、徵候に注意

開豁地、蔭蔽地搜索上の注意と著眼

特に支那に於ける市街、村落內の斥候要領

（支那人は軍隊來らば直に門を閉づるか又は避難す、圍壁、家屋に據る敵は搜索困難なり故に愼重に搜索すること、市街、村落內にて不意に敵と遭遇せば先制して第一發を早く發射すること、支那軍は側背より搜索するを有利とす等）

三　敵陣地の搜索

1. 視察搜索は主要なる手段なり故に成るべく視察に依り搜索するを要す此際注意すべき點は

イ、主陣地と前進陣地の區別眞陣地と僞陣地の判別

ロ、陣地祕匿の極度に唱へらるる結果敵兵の配備に就く時又は工事實施中等に視察するを有利とす

ハ、陣地の狀態、兵力、配備特に砲兵陣地の發見を肝要とす

要すれば側背より又は陣内に潜入するを得ば最も有效なり

2. 積極的捜索

イ、敵の警戒幕の爲主陣地帶の捜索不能なる時は勢ひ此を突破するか又は潜入せざる可らず晝間は攻擊行動に出づるにあらざれば目的達成し難き事多し

四 報告事項

敵情、地形、諜報事項、斥候の行動、報告に關し判斷と區別すべき事、要圖、寫景圖の利用

3. 尖兵長の行動と戰例

一 尖兵の行動要領

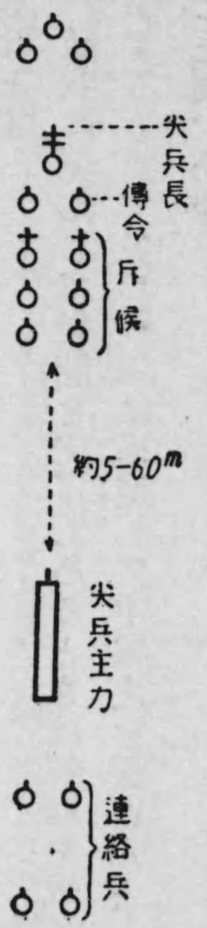
イ 尖兵中隊の前方にありて主として行進路上の捜索に任ずるものにして其障碍を除去し小部隊の如きは積極的に擊破して前進し敵と近接せば其行動、兵力、若くは陣地を偵察す。

尖兵長は將校之に任ず之最前に在りて諸情況に應じ直ちに解決するを要し然も其適否は直ちに本隊の行動に影響するを以てなり。

ロ、準備

1. 進路の研究、捜索の重點、躍進目標、命令の下達（敵情、小隊の任務、道路上斥候の派遣、尖兵群の引率特に輕機の行進位置を示す、連絡兵の配置等）

2. 尖兵前進部署



3. 捜索

主として進路上の捜索にして尖兵長自ら觀察するを本旨とす。停止せば直ちに警戒の配置をなす。

4. 戰鬪動作

イ、遭遇戰

一、戰場たるべき地區の要地は縱ひ戰鬪を惹起するも斷乎として之を攻擊

して占領す

二、不意に遭遇したる時は機先を制し最高度に射撃を發揚して之を撃破するに努め後方部隊をして參加の餘裕を得せしむ

三、敵の不利なる狀態に乘じ得るときは機を失せず猛烈果敢に攻撃し以て我軍をして有利なる態勢を獲得せしむる第一歩を作る

四、以上の場合は尖兵としては初めより全火力を使用し火線を構成するを本旨とす

五、敵我に先んじて展開を完了しあるときは輕擧を戒め陣地攻撃に準じ動作するを要す尖兵輕擧に暴進して中隊之を援けんとして苦境に陥りたることと屢〻あり

戰例　尖兵輕擧に暴進し苦境に陥りたる例

明治三八年三月二日奉天會戰の鴨綠江軍の左縱隊の尖兵(長豫備役特務曹長)は馬群丹に向ひ前進中只前面の高地にのみ注意し谷底道路を前進し兩側高地を捜索せざりし爲遂に敵より包圍せられ前面、兩側より挾撃せられ全く窮地に陥り

死傷續出して如何ともすべきやうなく中隊主力は之を知りて赴援せしかどもこれ又苦境に陥り大隊主力到達して辛うじて敵を撃退するを得たり。

ロ、陣地攻撃

一、敵の警戒幕を突破し捜索上の要點を占領し其背後の敵情地形を捜索する如く努むること之が爲一部をして其側背に迂回せしむる等を可とす

二、獨力驅逐し難しと判斷せし時は速に尖兵中隊長に報告し且其展開を掩護し極力敵情を視察し展望哨又は斥候を派遣して捜索せしむ

4. 對空班長の處置

對空班は敵飛行機の監視、竝に友軍飛行機の連絡に任じ行軍間は監視者を指定し或は斥候を派遣し駐軍間に在りては對空監視哨を設け戰鬪間に在りては行軍駐軍に準じ上空を監視す。

對空班の位置

四周の上空に對し視界廣濶なるを要す之が爲多くの場合高地、堆土、家屋の上等

を可とす

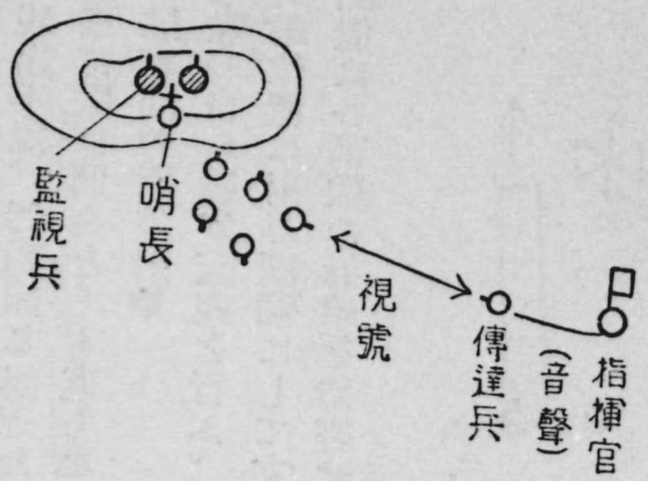
附近靜肅なること殊に夜間、曇天、薄暮等に於て然り

報告の傳達便なること

設　備

双眼鏡を有すること、遮光眼鏡、耳ラッパ、僞裝網、簡易測角器

傳達配置の一例



記號の一例

赤旗　敵機

白旗　友軍機

赤白旗　不明

方向　方向指數に依り「アラビヤ」數字又は射擊點數を示す

機數　單機旗左右
編隊旗圓く描く

距離、高度　近距離　旗の高さ肩以下
遠距離　同じく　肩以上

5. 對空射擊部隊と其監視要領及射擊隊形

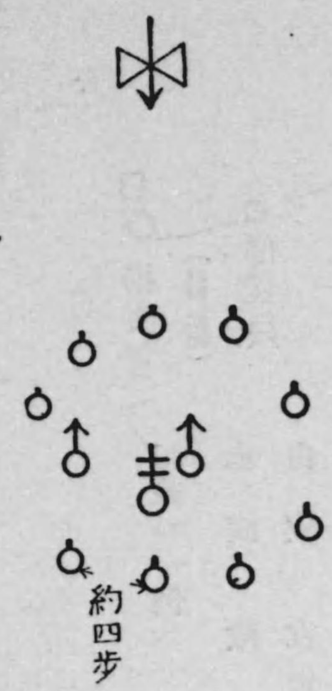
イ、現出不規、行動頗る迅速なる目標なるを以て敵機我有效射程内に入るや對空射擊部隊は別命なくも直ちに射擊を開始し之を擊墜するものとす。

ロ、駐軍間の對空射擊

部隊長自ら對空監視を行ふ。

射擊位置は射界廣濶にして友軍に危害を加へぬこと

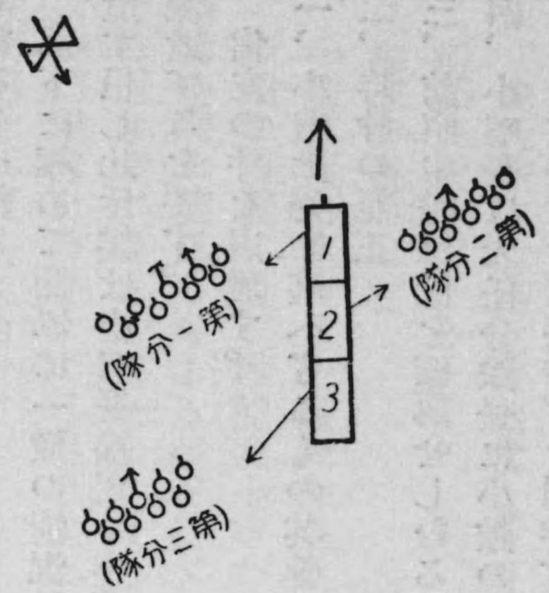
配置は各部隊の射擊を妨害せず地形地物を利用すること例へば



ハ、行軍間の對空射擊.

一、各兵間隔約三歩の二列、後列兵は前列兵の中間後方

二、道路の兩側を使用するを有利とす



其三　駐軍間の警戒

一　小哨長の動作と戰例.

小哨長の動作は狀況により差異あるも要は死節時を減少し速に警戒網を完成する

にあり。

二 任務受領より任地に到著迄の處置

1. 先づ圖上と現地と對照して警戒法を定め隣接小哨と所要の協定を爲す若し此際協定し難き時は優秀なる兵又は下士官を隣接小哨に最初より派遣して連絡せしむるも一法なり。

2. 部下に極めて簡單に一般の情況及小哨の任務を下達し警戒の爲速に斥候を派遣す但し此斥候は小哨長豫定の小哨位置に同伴先行し現地を成るべく指示して派遣するを要す。

3. 尙左の件を處理す。

一、小哨勤務に堪へざるもの其他必要の人員を中隊に殘置す。

二、時計の規正

三、前哨中隊位置を確認せしむる傳令を一時配置す。

四、小哨長は先任分隊長に小隊の引率を命じ所要の兵員（傳令、斥候若干組、下士哨長、歩哨掛等）を同伴す。

五、行進途中小哨と中隊との中間地形を研究す。

六、先行途中進路上に適當なる道標又は傳令を配置す村落、森林通過に於て殊に然り。

三 任地到著後の處置

一、小哨位置を概定す小隊の停止位置を指示す。

二、歩哨の位置、數、種類及小哨の抵抗線決定の爲地形偵察をなす。通常時間の關係にもよるが成るべく展望地點を利用し概要を決定し然る後重要なる所は必ず現地を踏査して決定す。

三、歩哨配置を決定せば同伴せる歩哨掛、下士哨長に共腹案を示し準備せしめ小隊到着せば直ちに命令を下し各々其位置に就かしむ。

四、小哨長は小哨の先任分隊長其他の分隊長に左の處置を命じ傳令（巡察長も）を隨へ歩哨に特別守則を與ふる爲出發す。

1. 銃前哨要すれば展望哨の配置

2. 分隊長に抵抗線の配備を示し工事を實施せしめ障碍物材料の蒐集をなさしむ

但し工事の實施は成るべく日沒後にすること
3. 歩哨配置間は兵力を集結しあること
4. 報告の要圖調製
5. 銃架材料の蒐集と井戸水の偵察
6. 隣小哨との連絡

四 小哨歸還後の處置

1. 第一に歩哨配置の報告を中隊長に
2. 銃前哨と展望哨に特別守則を授く
3. 命じ置きたる事項の點檢
4. 中隊長に改めて要圖報告と隣小哨に通報
5. 工事に着手（戰車、自動車に對しても）
6. 各勤務員の區別
7. 要すれば斥候の派遣
8. 中隊との連絡手段

9. 退路及敵襲に對する研究
10. 終夜に於ける搜索計畫（巡察を含む）
11. 戰備の度、假眠の方法を決定す
12. 天光の有る限り地形の偵察
13. 給養の準備

五 冱寒時に於ける注意

1. 凍傷豫防の爲人員を增加し服務時間の短縮
2. 火氣を使用せざれば假眠を許さざるを可とす
3. 歩哨は若干區域の動哨とすること
4. 風を遮蔽する位置を選ぶこと已むを得ざれば防風處置を行ふこと
5. 歩哨の銃の保持法は「腕に銃」を最良とす

六 瓦斯警戒

1. 瓦斯に對しては適切なる防護準備と瓦斯警報とに依り目的を達成するものとす

2. 瓦斯警報あらば直ちに裝面及其他の防護處置を講ぜしむるものとす
3. 小隊長以上は瓦斯警報を發する責任を有す然れ共他部隊の瓦斯警報に牽かれて妄りに之を發することなき如く特に注意すること
4. 風上部隊は風下部隊に對し各種の手段を講じ迅速に通報するを要す

小哨長の地形偵察は綿密なるを要し敵襲に際し指揮官沈着を必要とする戰例

大正八年十二月二十七日西伯利亞出兵の時野中支隊（歩兵大隊を基幹とす）はペトロフキーザヴオード驛に到着し松山小隊は同停車場西方約六キロの一小部落に小哨として派遣せらる。

午後七時頃任地に着し雪明と月光により地形を偵察し配備を完了す。

午前六時頃果して敵は夜襲し來り銃聲猛烈となり銃前哨は大聲叱呼して警報し兵は卒然として起立し齊しく小哨長を凝視す。

此時歩哨よりの報告は「敵兵二百と云ひ又敵二中隊或は前の山が眞黑なり」と云ひ的確ならず兵は緊張と驚駭とが面に現はる。

乃ち小哨長は殊更に沈着して平靜を裝ひしも心中事重大なるを直感し先任分隊長

に靜に全小隊を抵抗線につくべく命じ小哨長は先行して下士哨長の許に至り敵情を聞き小哨の來著するや直ちに十歩間隔に散開して兵力の大なるを裝ひ射擊を開始し交戰二十分にして之を擊退せり。

戰後地形を熟視するに我歩哨前に小流ありて敵は密集部隊の儘隱れて我に近接し得る所ありて之を利用せしものの如し何分夜間到着して地形偵察不充分なりし爲思はぬ不覺を招きしも歩哨の曰く「敵が直ちに眼前に(約三十米)來ました」と。

其四　行軍實施上の注意

一　歩兵行軍の出發準備と行軍間の注意

イ、靴の手入を十分にし革質を柔軟ならしめ所要の修理をなさしめ能く足に履慣らしめ置く事

ロ、裝具殊に革部の點檢を十分にする

ハ、股擦靴傷を豫防するため靴下竝に袴下に注意し要すれば靴下は裏返して用ふるか或は豫め靴傷膏を塗布すべし

ニ、背嚢内の入組品は重量の一方に偏せず平均にすること
ホ、背嚢附着品を堅確にする
ヘ、入浴、爪剪り、頭髪を刈る
ト、十分就眠せしむ
チ、出發の朝食は充分採食せしむること縱ひ喫食し得ざるも之を携行し適宜に喫食せしむること
リ、湯茶を充分携行
ヌ、雨天の場合銃器の鐵部に塗油
ル、健康狀態に注意し査問すること
ヲ、出發直前簡易なる體操を實施せば有效なり

行軍間の注意

イ、細心の注意を以て部下の心理狀態を觀察し特に意氣を振作すること
ロ、行軍々紀を嚴守せしむ
ハ、銃の擔ひ方に注意

ニ、住民地、市街の通過に際し特に軍隊の威容を保持せしむ殊に外國に於て然り

二 休憩時の注意

1. 休憩に移るには特に迅速にして徒勞を避く
2. 叉銃により通路の妨害をなさぬこと特に馬匹の通行に注意して銃を破損せぬこと
3. 解散せば必ず道路の一側に出で速に休憩
4. 休憩時間を告知すること足部の手入をなすこと
5. 夜間は叉銃竝に材料に特に注意すること
6. 湯茶の準備あらば直ちに補充せしむること
7. 夜行軍にては靜肅と火光に注意すること特に居眠り兵に注意し必ず點檢すること

三 M.G隊及A.i隊の行軍上の注意

イ、馬裝に就き

鞍の位置、腹帶緊張の度、軛、靭の程度、鞍下毛布の置き方、馱載物の縛著の

點檢と左右平等の重量如何等

ロ、行進間廣き道路にありて三列行進を有利とすることあり

ハ、駈歩、森林通過後は馬裝、駄載物を點檢する要あり

ニ、危險なるか又は急坂降下の際の馬の誘導と夜間馭卒の動作に注意

ホ、休憩時には分隊長は銃(砲)手に分擔業務を命ず

例へば　一番乃至四番　卸下　五—六番　水與　七—八番　馬手入

ヘ、通常卸下す殊に平射砲は成るべく全部卸下す

ト、大休止の時は通常脫鞍するを可とす(中、小隊長の命による)

四　炎熱、冱寒時の行軍に對する注意

イ、前夜の熟睡と十分の喫食は最も必要なり

ロ、平素健康ならざるもの又は勤務關係にて睡眠十分ならざるものは特別の注意を拂ひ許可せられたる範圍内にて勉めて服裝を開濶にし(屢、脫帽、開襟、垂布、青草を入れる等)又常に水筒に水を充塡せしむること

ハ、休憩時は蔭影を利用すること且風通のよき所を選ぶこと

ニ、時々隊伍を疎開し或は日光、風向等を考へ其列を交代せしむること

ホ、特に生水の飲用につき傳染病又は毒蟲に對する注意

ヘ、冱寒時には防寒具裝着の爲身體の自由と負擔の關係を考慮し歩度の調節を適當にし銃の擔ひ方も各兵の隨意とし凍傷を豫防すべし

士氣を常に振起すること必要なり

ト、輕機の携行者は屢〻交代するを要す同一人にて五分間を超過せしめざること

チ、小休止は勉めて時間を短縮し其回數を多からしむるを可とす

リ、休憩中直接氷雪上に腰を下さざること居眠りをなさざること又發汗せし時は直接冷氣に觸れざること必要なり

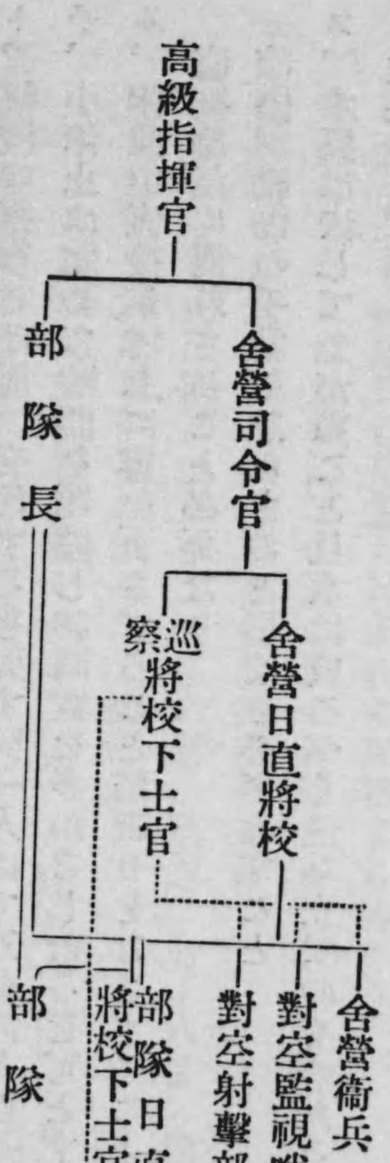
凍傷、靴傷の手當を怠らざると用便を必ずなすこと

ヌ、水與は決して急がぬこと且水は成るべく汲み立てのものたること皷を浮すと効果あり。

其五　宿營

一 舎營に關する參考事項

1. 舎營勤務系統



イ、舎營司令官は舎營の內務、及警備に關する事項を統轄す

卽ち各部隊の舎營區、舎營日直將校及巡察將校(下士官)の指定

衛兵、對空監視、同射擊部隊の兵力、位置、部隊を指命

各種警報に際し取るべき特別處置の規定等

ロ、舎營日直將校及巡察將校下士官

各舎營區每に舎營日直將校一人(通常大尉大部隊にありては佐官)を置き尙必要に應じ巡察將校(巡察下士官)若干人を置く

其業務左の如し

舎營日直將校は舎營司令官の業務上の輔佐官にして其指示されたる事項を部隊日直將校、下士官に傳へ且舎營衛兵、對空監視哨及對空射撃部隊を指揮す

巡察將校(下士官)は舎營區內の警視に任ず

ハ、部隊日直將校(下士官)各兵種の大隊(大隊をなさざる隊は聯隊)は小隊長一人を各獨立中隊若くは之に準ずる部隊は下士官一人を以て部隊日直とす

舎營日直將校の業務を輔佐し其舎營地區內の警視に任ずると共に舎營の內務及警備に關する所屬部隊長の命令の實行を警視し且部隊衛兵を指揮す

ニ、一舎營區の兵員寡少なる時は別に舎營日直將校を置かず舎營司令官自らヲを兼ね或は部隊日直將校をして之を兼ねしむ

ホ、舎營と部隊衛兵の業務上の差異

(舎、衛)は敵及住民に對する舎營區の直接警戒と安寧秩序を維持すること主

なる任務なり

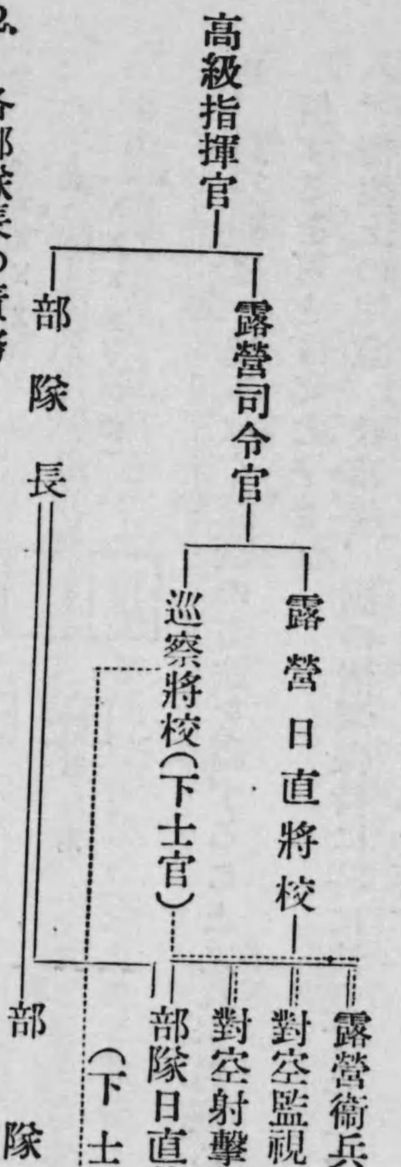
(部、衛)は軍旗、銃廠、砲廠、車廠、行李に歩哨を立て之を監視し小哨勤務の規定に準じ服務す

ヘ、宿舎長

1. 設營者より舎主氏名、位置、經路、宿泊人員を承知し警急集合の位置及經路を詳知し時計を規正す
2. 特別の勤務者、患者等には自己の宿舎に來る注意を懇切に示すこと
3. 入宿せば標記を撤去すること
4. 裝具の整備、武器の手入、被服の手入をなさしむ
5. 舎營券を速に給養掛に送附
6. 靴傷、其他の治療法を速に實施せしむ
7. 食事の分配の爲所命の時間に傳令の派遣
8. 家人に病人の有無を偵知し速に報告すること
9. 人員點呼は通常宿舎毎に行ひ宿舎長自ら報告に行き併せて命令を受領し時計を規正し命令の傳送は必ず全員起床して之を行ふこと
10. 軍機の保護に絶對注意すること
11. 出發前武裝の檢査異狀の有無を點檢すべし

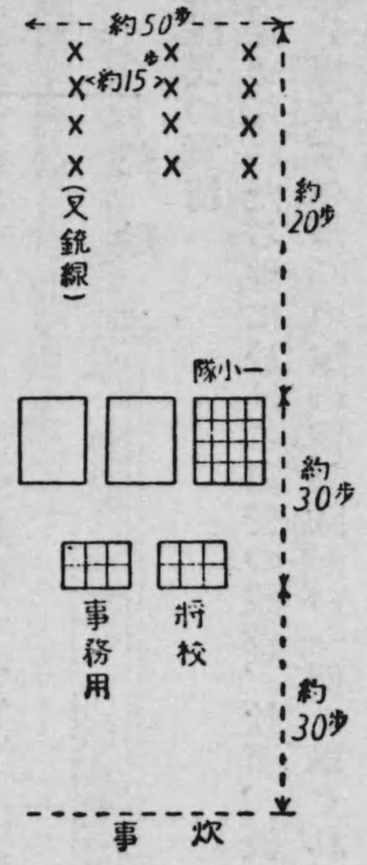
二 露營に關する參考事項

1. 露營勤務系統



2. 各部隊長の責務

イ、指定せられたる地に於ける露營の設備、炊事、汲水等に關する事は各部隊長之を規定す今歩兵中隊の露營隊形の一例を擧ぐれば左の如し



ロ、對空顧慮　成るべく遮蔽の方法を講ずること之れが爲或る程度不規則に配置するを可とすることあり

ハ、衛生上の注意　炊事場、厠の清潔保持に特に注意すること殊に一地に永く駐止する時は格別に注意し其施設を行ふを要す

炎熱、冱寒の時は保健上の注意肝要なり

三　炊事上の注意

1. 炊事場　上空及地上に對し成るべく遮蔽のこと

良水を得るに便なること、糧秣の受領分配に便宜なること、風向に注意すること

2. 炊事班の編成

中隊が一統制の下に行ふか又は小隊毎に行ふに依り差異あり今假に中隊が實施するとせば概ね左の如くせば可なり

長　將校又は准尉

糧秣受領班　下士官一、兵各小隊より五名計十五名

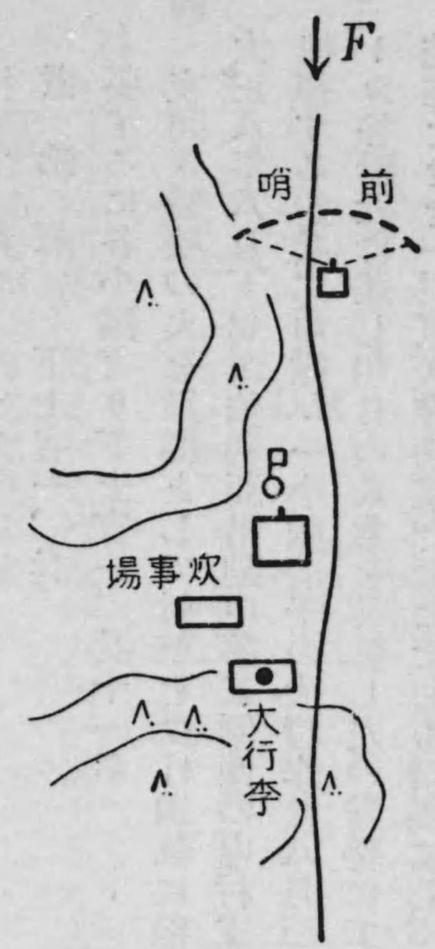
洗米班　下士官一、兵　九名

煮沸班　下士官一、兵　九名

要するに各小隊より下士官一、兵十一名

四　夜間炊爨壕の火を目標として射撃を受け困難に陥りたる戰例

大正八年八月下旬西伯利亞出動中第五師團の中村支隊より派遣されたる大隊長の指揮する歩兵二中隊M.G一小隊若干の大行李は八月三十日過激派軍掃蕩の爲スーベーカ谷附近に達し明日の攻撃を準備し左の隊勢にて露營す、午後十一時頃盛んに銃聲をきき一同直に警急集合をなせしも暗黑にして何れより敵が射撃するや全く



杖は曲り甚しきは銃口蓋を裝したるまゝ射撃す等の混雜に陷りたり。

敵は益々近接し「ウラ〳〵」を連呼しつゝ突撃せんとし中隊（勤務員を除き僅に三十名内外）は必死の防戰に努め直ちに炊事の火を消し辛うじて撃退するを得たり。

畢竟炊事場の火煙を敵に暴露し夜襲を受けたるものにして然も後方より攻撃せられ敵のM.Gの爲半數の死傷馬を出し行李の運行全く至難の情況となれり大に注意を要する戰例なり。

不明なり。

沈着して見れば我炊事場の火煙を目標に彈丸集注しあり又銃線は其近傍なりしため火に照らされて敵の目標となり近寄り難く辛うじて一銃づゝ解銃して直ちに應戰せしも周章しあるため棚

第十一章　空地連絡と戰例

一　編成

歩兵部隊は下士官又は上等兵を長とし數名の兵に所要の器材を附して編成し其一部は對空監視を兼ね成るべく自轉車を利用す。

二　布板の布置法

成るべく開豁地に於て附近に混同し易き色彩の物件を殘置せざるを要し又敵機に發見せられざる如く敵方に反する斜面等を可とす。

班長としては隊號布板の布置を命じ飛行機に對する應答、又は要求若くは指揮官の指示事項を數字布板號表に基き所要數字を兵に命す。

兵としては命により直ちに隊號及指數布板を布置す。

布板撤收は班長の命により數字撤收又は全部撤收をなす。

三　飛行機と地上部隊との通信

對空布板を有せざる地上部隊飛行機よりの「呼出」の信號を見るか若くは飛行機の

行動により通信筒投下の意圖あるを察知せば速に標示布等を布置し或は手旗、布片帽子を振る等臨機の處置に依り投下位置を示すものとす。

1. 戰線標示　聯、大隊本部は其位置に隊號布板を布置し最前線の歩兵は小隊毎に其位置を標示す。

2. 行軍縱隊の標示　尖兵中隊又は縱隊の先頭(後尾)中隊は先頭に在る小隊の各兵をして頭上に白布を覆はしむると共に其最先頭に標示布を展張す。以上の標示は飛行機より承知の有りたるとき撤收す。

3. 信號彈信號

信號彈信號は擲彈筒、信號彈拳銃、打上筒等を以て臨時定むる規定により煙火又は爆煙を發射し最も單簡なる事項を瞬間に傳達するために用ふるものとす。機上より行ふ煙火信號は煙火の種類に應じ必要なる意味を規定し地上との通信を行ふものとす。

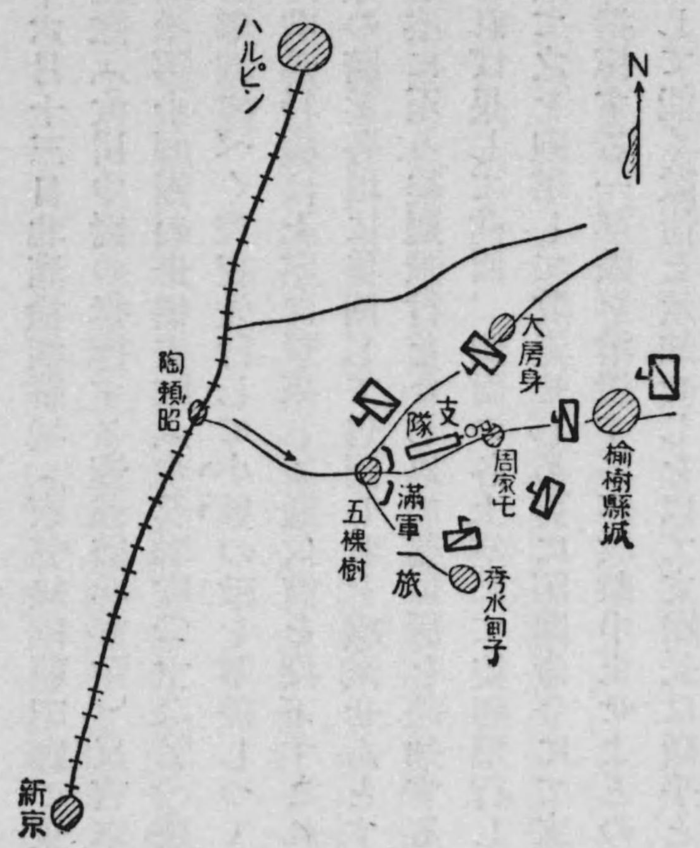
四　戰例

一　飛行機と地上部隊の連絡適確にして數十倍の敵に包圍せられたるも之を擊破せり。

大正七年六月十三日北滿楡樹縣城（南部線陶賴昭驛の東方約六十キロ）附近に於て大川支隊（大川中尉の指揮する滿洲騎兵部隊）反吉軍の爲夜襲せられ隊長以下全滅するや第十師團の舟橋支隊（歩兵聯隊(二大隊欠)騎兵中隊山砲十門）は急遽此の敵を擊滅すべく晝夜兼行して小數の敵を擊破しつゝ將に楡樹城附近に達せんとするや我飛行機は上空に飛來して通信筒を投下すこれによれば支隊の前面、側背悉く敵の騎兵各地に集團して包圍し我を殲滅せんとするものの如く飛行機は敵集團の上空に至り旋廻飛行をなし以て其位置を通知する旨附言しあり依つて之を觀望しあれば果して前面、側面の各上空にて旋廻飛行しあるを以て支隊は直ちに山砲を以て之を砲擊して敗走せしめ更に師團命令にて支隊の危救を增援するため旅團長の指揮する一部隊を增遣する迄攻擊中止せよとの命ありしも飛行機との連絡適確にして能く敵情を承知せしを以て支隊長は斷乎として楡樹城を攻略して之を占據し敵主力は算を亂して遁走せり。

榆樹城附近戰鬪

大正七年六月十五日



第十二章　彈藥補充

一　攻擊に於ける彈藥補充の要領

戰鬪前

1. 大隊長は情況を達觀して小行李彈藥の全部又は一部を分配すべきかを決定す
2. 中隊長は通常下士官に運搬兵を指揮せしめ分配所に至り彈藥を受領せしむ。
3. 彈藥は小隊長の命に依り各兵に分配す各兵は雜囊其他に收容す。

戰鬪間

1. 第一線補充には通常豫備隊の人員を以て行ふ已むを得ざる時に限り第一線又は小行李の人員を使用す。
2. 中、小隊長は常に彈藥の現況を承知しありて補充を要する時は中隊長は豫備隊の兵員を使用して補充せしめ狀況特に必要ある時は一時豫備隊の彈藥を補充することあり。
3. 死傷者の彈藥を收集すること肝要なり。

第十三章　鐵道、船舶輸送の注意事項

1. 停車場(碇泊所)衛兵の配置

重要停車場及海運地の整理、軍機の保護及び此等要地の警戒等の爲必要ある時は停車場司令官、碇泊所司令官は所要の衛兵を配置す。

衛兵所は通常停車場中央附近に置き歩哨は主要なる出入口、倉庫又はホームに位置せしめ所要に應じ巡察を派遣す。

2. 鐵道乘下車

イ、勤務員　輸送指揮官は將校又は下士官を以て通常人員、馬匹、材料毎に搭載(卸下)掛を設け之に所要の人員、材料を配當す。

ロ、搭載掛の任務

各搭載掛は輸送指揮官の意圖を受け現地の現況に應じて細部の搭載(卸下)法を定め且之が實施を擔任するものとす。

卸下地を異にする人馬、材料を搭載するに當りては途中車輛の解放に當りて

之が入替を要せざる如くするを可とす。

ハ、乘　車

軍用列車は遲くも發車前五分迄に搭載を終らしむること。

材料の搭載に付注意すべき件

一、危險物は積載量の三分の二を超過せざること

二、材料は成るべく車内に平等に搭載し其一部に偏重せざること

三、火災の虞ある物品を搭載せる貨車には覆を用ひ又要すれば束藁を浸した る水桶を備へ監視兵を置くこと

ニ、人員搭載法

中隊は各車の乘車人員に應じ區分す

通常背嚢を脱す

車内各兵の占位順序及裝具の整頓法を示す

輸送指揮官は「乘車」の號令又は「前へ」の號音を下す(小笛は嚴禁)

ホ、下　車

下車停車場の前に於て輸送指揮官より命令あるも各部隊にても豫め準備しあるを要す

下車順序は將校、卸下掛、衛兵及使役兵とす次で下士官兵を下車せしむ

不時に下車を要する時は輸送指揮官の命により動作す

3. 船舶乘船、上陸

1. 勤務員　輸送指揮官は各搭載掛及衛兵(船内要すれば陸上)尙要すれば人馬救護掛を設く

2. 軍隊の(隊屬荷物を含む)乘船、上陸は(揚陸)自ら實施す

是が爲乘船順序は

材料、馬匹、人員とし上陸は概ね此反對とす

救命胴衣を裝著せる時及發動機附艀舟にては決して喫煙すべからず

各艀舟には必ず指揮官を定む全員其命なくして動作を禁ず

人員乘船につき注意すべき件

中隊長は一艀舟の搭載定員毎に區分し指揮官を定む

帽子の頤紐をかけ徒歩兵は靴を脚絆の上に穿ち背嚢の釣金を脱し乘馬者は拍車を脱す

乘船には指揮官の指導により銃を提げて乘り込み順序に遠き所より船首に面し前後左右を密接にし踞座す

馬匹搭載要領

馬匹は集合場にて脱鞍し野繋勒に銜み換へ馬裝具(鞍嚢を除く)は鞍下毛布にて梱包し適置の標札を附し準備をなす

搭載前若干の水飼をなし緩除なる運動をなさしむ

一艀舟搭載馬數に應じ一團となし一伍縱隊にて逐次搭載す此際靑草人蔘を準備するを可とす

馬具は馬匹と同一船を可とす

3. 上陸

上陸直に戰鬪に應じ得る如く成るべく建制部隊毎に上陸を準備す彈藥は通常船内にて分配す

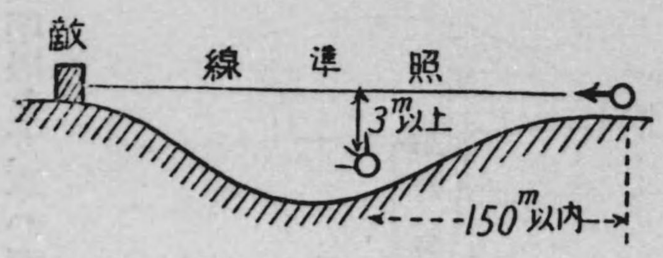
舷梯を下る時は特に迅速確實靜肅にして音響等を發せざること

風浪高き時は艀舟に移るには輕裝兵をして補助せしむ

艀舟航行中敵より如何なる方法をなす共沈着して指揮官の命に從ふこと指揮官としては所要に應じ一部をして應射せしむることあり

敵彈に依り浸水せんとせば直ちに應急修理をなし成るべく速に着岸せしむべきこと

着岸せば命令一下直ちに跳り込み左右に排開し水際の敵を擊破し上陸するを要す此際小隊長は率先勇敢に部下に範を示し上陸戰鬪成功第一歩の成果を獲得するものとす



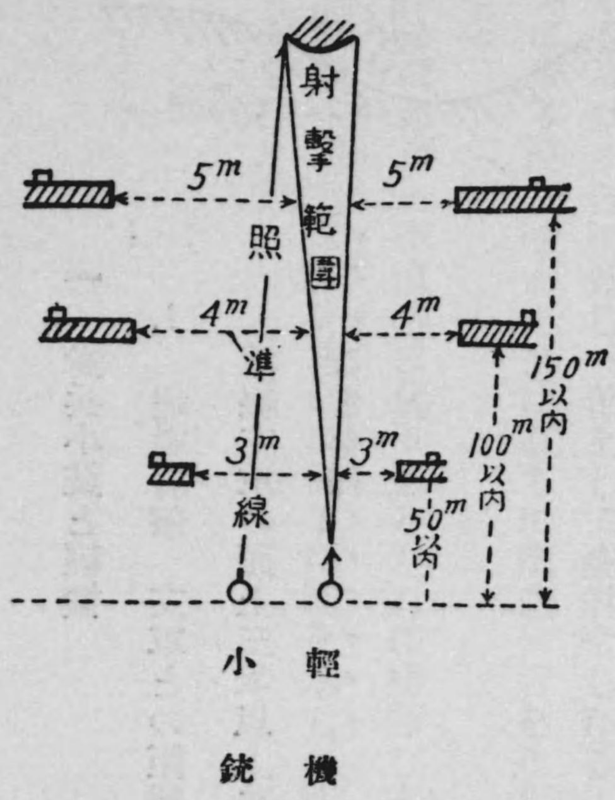
第十四章　歩兵射擊について

一　歩兵小銃と輕機

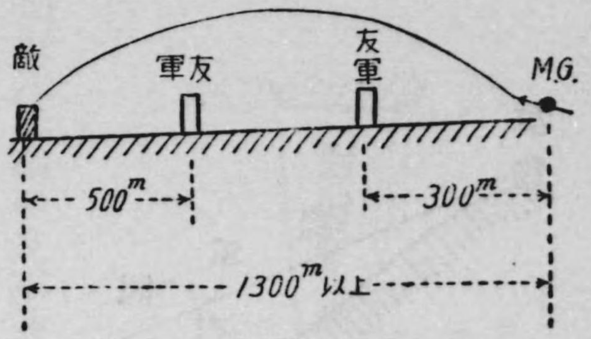
1. 超過射擊　友軍との距離一五〇米以内に在りては照準線友軍の頭上三米以上に通ずる場合に於て實施することを得

2. 間隙射撃

照準線を友軍の翼より其距離に應じ離隔せしむるを要す



二 機關銃、平射歩兵砲

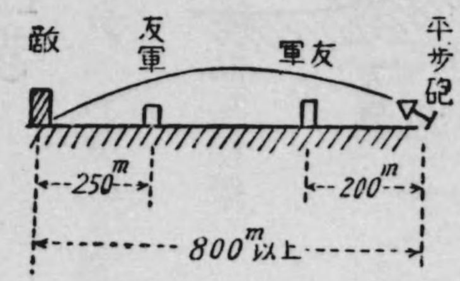


一 平坦地超過射撃

平坦地にて超過射撃を行ふには目標に至る距離

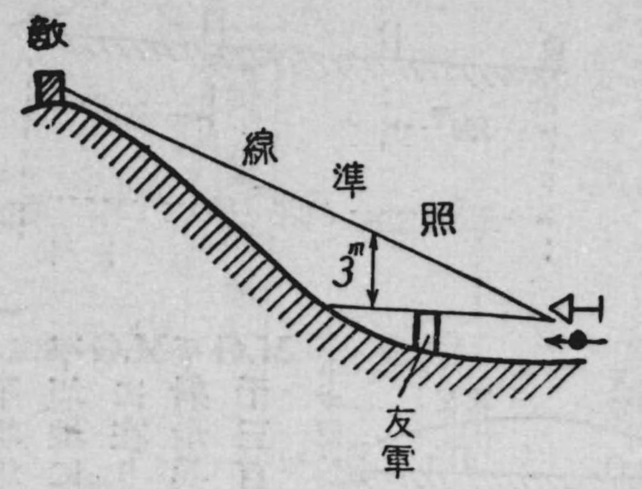
M.Gに在りては千三百以下
平射歩兵砲は八百米以下 } にては危害の虞あり

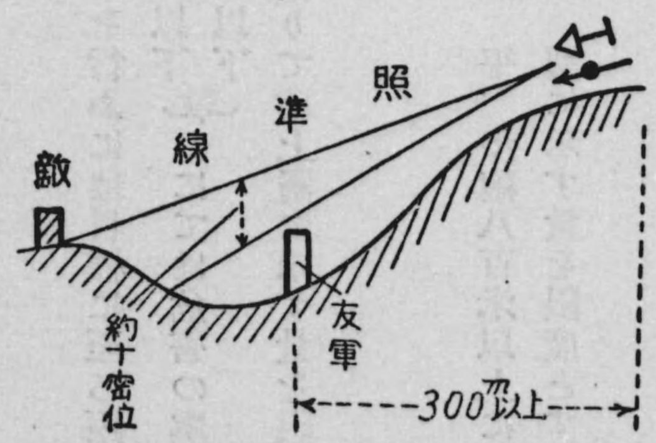
M.G千三百米以上に在りては上圖に示す量を限度とす



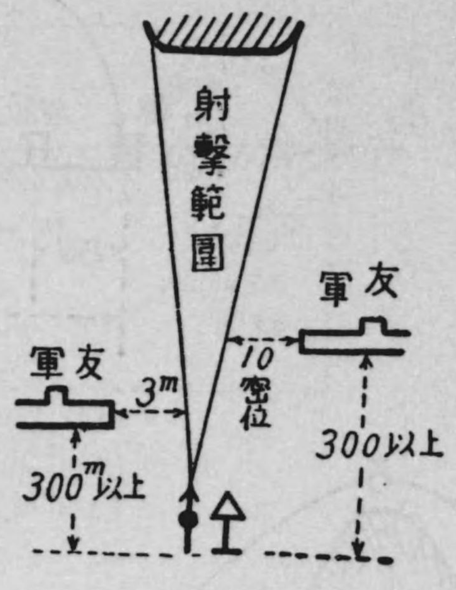
平、歩砲八百米以上にありては上圖に示す量を限度とす

1. 傾斜地超過射撃（M.G i.A共）





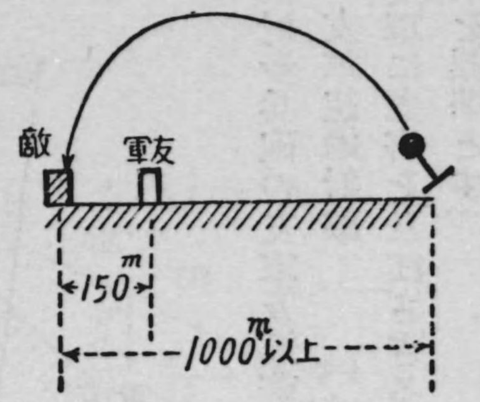
2. 間隙射撃（M.G i.A共）

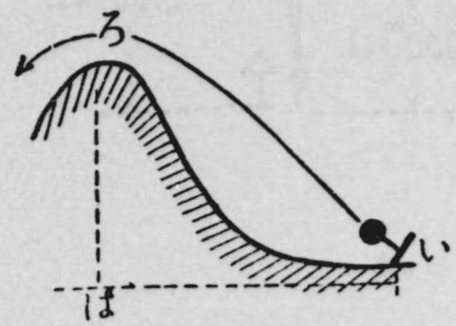


三　曲射歩兵砲の友軍及遮蔽物超過射撃

1. 友軍超過射撃

友軍に危害を及ぼさざる爲には友軍と敵との離隔度は千米以内に於ては百五十米を標準とす



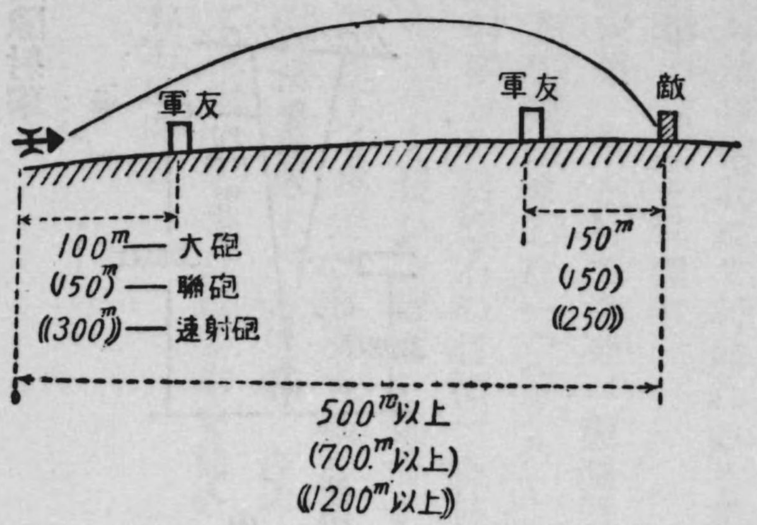


2. 遮蔽物超過射擊

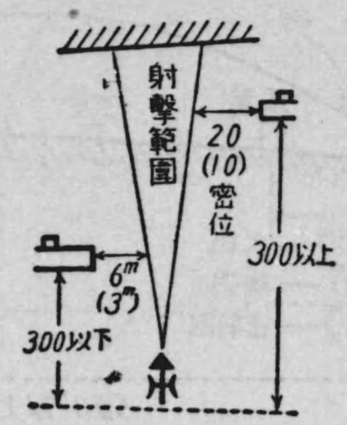
砲の位置は（い）より遮蔽頂（ろ）に至る水平距離（い—は）を遮蔽物の高さ（ろ—は）より大ならしむるにと

四　大隊砲（聯隊砲）（速射砲）の超過及間隙射擊

1. 超過射擊



2. 間隙射撃



（　）内は聯砲
速射砲はM.Gに同じ

第十五章　瓦斯彈射撃の要領

一　現今外國軍砲兵にて行はれある瓦斯彈射撃の要領は概ね左の如し。

1. 射撃の種類と目標等

殲滅射撃　主として放列、觀測所、M.G、散兵壕等に急襲的に大濃度を以て覆ひ殺傷殲滅せしむ一「ヘクタール」に野山砲百五十發、十五榴二五發位

制壓射撃　小目標右の目標、森林中の通路、歩兵、宿營地等瓦斯雲を以て所望の場所を覆ひ防毒面を裝着せざるを得ざるに至らしむ一時彈を用ひ一時間制壓する爲要する彈丸概ね右に同じ

撒毒射撃　毒化すべき地點、森林、橋梁、部落の出入口及隘路等にして敵をして撤退せしめ或は要點を豫め占有せんとするとき又は交通遮斷の時彈丸概ね右に同じ

第十六章　飛行機爆撃要領

一　爆撃方法

1.　一般的爆撃　所要の高度を以て所望方向より目標に向ひ進入し水平飛行に依り器測爆撃

2.　低空爆撃　水平と急降下爆撃との二法あり水平は所望方向より進入し器測若は目測による急降下は所望方向より進入し目測により爆撃す

二　爆弾投下法　單發、同時、連續の三法あり單發は其都度照準を復行して投下し同時は所望爆弾を一擧に同時投下連續は各弾の投下間隔を規正し連續投下す

三　爆弾の種類

イ、破片弾　著大なる爆發と音響を發し人馬殺傷威力大なり又火災を起さしむ

ロ、小型地雷弾　主として構築物、鐵道、飛行場等の爆破に適す

ハ、中型地雷弾　堅固なる築城物、鐵橋、輕易なる坑堵製物爆破

ニ、大型地雷弾　堅固なる坑堵製術工物、艦船爆破

ホ、装甲弾　最も堅牢なる物體に對する爆破

第十七章　交通上の參考

一　諸部隊通過の爲道路幅員の概要

イ、四列側面縱隊徒歩兵	二伍縱隊の騎兵	約一米五〇	曲半徑　平地八米
	砲兵	約一米〇〇	坂路二〇米
ロ、山砲兵	繫駕	約一米五〇	曲半徑　六米
	駄載	約一米〇〇	
ハ、野戰重砲兵		約三米〇〇	曲半徑　平地一〇米
			坂路二五米
ニ、輜重車輛		約二米〇〇	
	駄馬	約一米五〇	
ホ、自動車		約三米五〇	曲半徑概ね野重砲に同じ

二　徒渉場

（流速一米以下河底堅硬なる時）

歩兵	〇米八〇	騎兵　一米〇〇
		野砲兵　〇米五〇

山砲兵	〇、四〇—〇八〇	野戰重砲兵　〇、五〇
輜重駄馬	〇、八〇	同車輛　〇、五〇

三　氷上通過の標準

イ、散兵其他間隔距離を開きたる徒歩兵　〇、一〇
ロ、四列側面縱隊及二伍縱隊の騎兵　〇、一五
ハ、野砲兵　〇、二〇
ニ、山砲兵　〇、一七
ホ、一伍縱隊の駄馬　〇、一二
ヘ、三噸自動車　〇、三〇

四　輕渡河材料の搭載力の概要

イ、九二式輕門橋	軍裝兵約三〇人	
ロ、九一式大浮囊舟	同	約十二名
ハ、九一式中浮囊舟	同	約十名
ニ、九一式小浮囊舟	同	約二名

第十八章　作業に關する參考

一、侵徹量

	尋常土	砂	土嚢	泥土	踏み固めたる雪	コンクリート	鋼板
イ、小銃弾	〇、九—一、〇	〇、六—〇、八	〇、五	二、〇	〇、三—〇、四		〇、〇—〇、〇三
ロ、野砲弾	〇、四—一、〇						
全　弾子破片	一、〇—二、〇				八、〇		
ハ、野戰榴彈砲弾子破片	一、〇					〇、一〇—〇、四五	
全　弾	二、五—三、〇						
ニ、二四乃至二八サンチ榴彈砲弾	四、五—七、〇					〇、三〇—〇、八〇	

備考　M.G弾は小銃弾に概ね同じ

二　射界清掃に要する基準概見

イ、伐木（中徑〇、四〇—一米一本）人員九　器具（斧、鋸各一）　時間約八分—一五分右伐木人員四名ならば約一二五分—一二時間半

ロ、同（中徑一一〇—五〇糎）人員四名　器具（疊鋸一）　時間七分—約十五分

ハ、樸叢の苅除　百平方米に一名　器具（鉈三手斧一）　時間一時間—二時間

三　散兵壕構築時間概見

イ、掘擴散兵壕（一分隊正面三五米、三米横墻一個）　約　三時間

ロ、立射散兵壕（右に同じ）　約　二時間

ハ、輕機掩體（獨立）　約　一時間

ニ、各個散兵壕（立射）　約　〇、四五

ホ、同　膝射壕　約　〇、四五

第十九章　支那事變一、二の情況に基く戰例

我邦として一大決意の下に發動したる日支事變は其兵力、規模の厖大なること日露戰役以上の大膺懲戰でこれこそ東洋和平確立百年の大計を定むる大聖戰たることは今更詳述する要はない然も公然として兵器、人員を提供して飽くまで蔣政權を援助し我國をして其討伐に奔命疲勞せしめんとする第三國の魂膽ある非常時局に遭遇し苟も身を軍籍に奉じ國防の第一線に立ち速戰卽決の大本針に邁ひ着々其準備と修養を希望せぬものはあるまいと信ず。これが爲一日も早く約一年に亙りし北支、中支の機動戰なり又は陣地戰なりの戰鬪報告を其研究資料としたき望みは大旱に雲霓を望む感切なるも、如何にせん軍は尙作戰中に屬し防諜の軍紀は之を許さず已むを得ず各種公表せられたる諸報道に依り綜合推斷して其現狀の一端を捉へて近代戰例の容態を親覩し辛うじて研究の資料に提供したのである。

一　近代戰としての上海陣地戰

支那事變勃發以來北支には疾風の如く連戰連勝破竹の勢を以て機動作戰に大成果

を收め、中支には上海附近に於ける壯烈なる敵前上陸以來の世界戰史上未曾有の縱深四十餘キロに亙る一大陣地帶を突破し、更に杭州灣に驚異的敵前上陸を敢行し遂に首都南京を陷れ、今や南北より除州一帶に蟠居し中外宣傳の根據たらしめんとする約四十餘師の蔣介石軍を一擧に殲滅せんと策戰中にして、皇軍の活躍又以て深甚の敬彰を擧國一致贊仰せねばならぬのである。昨昭和十二年十月十九日陸軍省では日露戰と今次事變とを比較し

明治三十七年六月十三日普蘭店を奧大將の第二軍が占領してより翌三十八年三月十日の奉天大會戰に至る歷史的大追擊戰と今次事變の京漢、津浦兩線に於ける我神速部隊の活躍と旅順攻城戰と上海陣地戰とを比較したる興味ある研究を發表した。

是に依れば往年日露の役難攻不落の最新式要塞として露軍が世界に誇り、我軍又十萬の兵を以て攻城實に六ケ月死傷約六萬の犧牲を出し爾靈山形改まるの激戰苦鬪に比し、今回の上海戰は是又純然たる陣地戰にして然も支那としては近代的裝備に全力を傾注して、最新の兵器、科學の全能を集めて我皇軍に反抗し

たる點は旅順戰鬪に匹敵すべき近代戰の戰例であらう。

旅順攻城戰と上海陣地帶攻略に關する比較

區分	旅順攻城戰	上海陣地攻略
敵兵力	陸兵約四萬	第一線約三十萬（三十箇師）
地形其他	一、起伏地 二、孤立せる要塞	一、平坦にして戰砲及歩、重火器の協同困難 二、五十乃至四、五百米毎に縱横の大小クリーク交錯し障碍を呈す 三、據點に適する小部落稠密に點在す 四、列國の租界あり國際上の掣肘を受く
設備	一、堡壘、砲臺等個々の設備は極めて堅固	一、要點にトーチカを準備し各クリーク、各部落を利用し近代化せる防禦施設を完備せる一面の陣地帶にして縱深四十キロに亙る所あり
我兵力	一、四師團と攻城部隊	〇〇〇〇

攻擊經過	
一、攻圍線の攻略（自六月下旬至八月一日） 前進陣地を驅逐し本防禦線に對する攻擊を準備す 二、第一回總攻擊（自八月十九日至二十四日） 1.強襲法 2.不成功（臨時構築の二堡壘を占領す） 3.損害　日軍　一萬五千　露軍　一千五百 三、第二回總攻擊（自十月二十六日至同三十一日） 1.正攻、強襲兩法併用 2.不成功（咫尺の間に對峙し攻擊頓挫す） 3.損害　日軍　三萬八千　露軍　四千五百 四、第三回總攻擊（自十一月二十六日至十二月六日） 1.正攻法 2.不成功 3.遂に二〇三高地攻略を企圖し成	一、敵前上陸及直後の攻擊（自八月末至九月中旬） 1.八月末以來逐次敵前上陸を敢行し所在の敵を驅逐し羅店鎭、劉家行東側、江灣鎭東側の線に進出す 二、第一期（自九月中旬至同下旬）（兵力僅少なる時期に於ける主陣地帶の攻擊にして便宜上第一期と稱す） 1.奇襲、強襲、坑道、對壕作業等各種手段を盡す 2.極めて困難なる各種條件を克服し逐次陣地の一角宛を奪取し優勢なる敵の屢次の逆襲を擊退しつゝ前進 3.敵の遺棄せる死體五萬六千七百六十七 其速度概ね平均一日二百米、 三、第二期（十月一日以降） 1.兵力概ね充實し更に有利に進捗しつゝあり

	所要日數	損害
4. 功損害 日軍　一萬七千 露軍　四千 五、爾後の攻撃、開城（自十二月十八日至一月一日） 1. 二〇三高地より港内敵艦砲撃、 2. 攻撃正面堡壘の大爆破（地中戰） 一月一日開城敵降伏	一、攻略の爲所要日數　六ヶ月 二、損害　日軍　五萬九千四百 露軍　一萬	一、一ヶ月半にして陣地帶の縱深半を攻略す（第一期のみ） 二、敵に與へし損害推定　二十一萬人

二　神速敢果なる北支皇軍の機動戰

昭和十二年十月十八日陸軍省發表に依れば、北支全線に亙り常に數倍の支那軍を蹴ちらして破竹の勢にて進軍する我皇軍の機動戰は、共前進速度の平均日露役には一日一、二キロにして京漢、津浦兩線方面の平均速度は八キロにして如何に神速果敢に行動しあるかを推知することを得、即ち

明治三十七年六月十三日普蘭店を占領し北進した我軍は得利寺、大石橋、鞍山、

遼陽、沙河を攻略し、奉天の歴史的大會戰に凱歌を擧げたのは普蘭店を發してから九ヶ月後の翌三十八年三月十日である。此普蘭店から奉天までの全里程は二九二、八キロで一日平均速度は一、二キロなり。

支那事變

1. 京漢線方面

九月十四日良鄕を發した皇軍は涿州、保定を攻略したのが九月二十四日、石家莊が十月十日、順德に入城したのが十月十五日、そこで良鄕――順德間三九〇キロを三十一日間で踏破前進したる故に一日平均速度は實に一二、六キロである。

2. 津浦線方面

八月二十四日靜海を進擊した我神速部隊は九月十一日馬廠、同二十四日滄州、十月三日德州、十三日早くも平原を攻略せり。

靜海を發して五十日間此全里程二五〇キロ一日平均速度五キロ

三　山嶽重疊の峻嶺地帶の戰鬪

八月上旬我皇軍は京、津地方の支那軍を掃蕩し一擧して京漢、津浦線に添ひ南下

の大勢を整ふるや敵將蔣介石は大行山脈の嶮路を踏破して中央の精鋭五ヶ師を集結して、平津一帶の日本軍に對し側背より攻擊して徹底的に一大打擊を與へんと企圖す。共兵力我に數倍し兵器裝備又優秀なり。

皇軍は此報に接するや、直ちに迎擊突破の決意を固め攻擊前進を開始す。然るに地形は山又山の嶮峻なる山嶽地帶にして全く道なく、四キロを行くに五時間を要し、從つて多大の時日を費し糧食、彈藥の補給も益〻困難となり、不眠不休不食の難行軍を續けて一刻も早く遮二無二進擊突進して敵の大企圖を突破して未然に之を防止せねばならぬ情況なりき。

1. 阪田部隊の山地攻擊戰

阪田部隊は八月十日夜半行動を開始し、白羊城、陳家堡方面より長城線を突破して敵陣地を側面より攻擊する策戰に出たが、何しろ敵は我に數倍する四ヶ師の多數、苦辛慘憺八月十三日午前十時三十分頃、阪田隊長は部下を指揮しつゝ前進中敵兵團を發見し、直に攻擊を開始せんとするや敵は我軍の寡弱なるを看破し、忽ち猛烈なる攻擊を始め玆に山中の遭遇戰は開かれたり。

約七百許の敵は山を超え谷を渡り蝗の大軍の如く眞黑な一團となり突如肉迫し來る。阪田部隊は一部隊に重機を配して山上に位置せしめて攻擊據點たらしめ主力を以て山徑を迂廻し敵の側背に出で、其背後より猛然と攻擊せしむ。我重機は全火力を發揚して之を支援し、峨々たる峻嶺上に彼我の肉彈戰は展開し或は顚落して斷崖下に墜落するもの、傷きて谷底に落ちるものあり。我軍は出來得る限り高所を占據して常に敵を瞰制しつゝ遂に之を擊破し、敵死體約三百を殘して敗退せしめたり。

直ちに追擊に移りしも如何にせん阪田部隊は我主力と全く連絡を絶ち彈藥、糧食殆ど盡き、敵の遺棄したる輕機と彈藥を拾ひ集めてこれを逆用し、玉蜀黍を嚙りつゝ其飢を凌ぎ、悲壯なる決意を以て追擊前進を續けた。此日の戰ひに前の上海の勇士栗原大尉は身に數彈を受け壯烈な戰死を遂げた。

八月十九日正午頃我主力部隊長は阪田部隊危機に在るを察知し、大場部隊に急遽救援を命ず。時恰も車軸を流すが如き豪雨にて之を冒して急行するも道なく川は增水して腰まで沒し、眞に難行を盲減法一列縱隊にて前列の戰友の帶革を

掴み合ひ、雨を吸つて渇を醫し雨の爲一層重くなりし軍裝を搖り上げつゝ手さぐりで闇の中を進軍し、終夜行軍二十日午前六時、漸く阪田部隊の苦戰中なる所に到達し、戰機將に迫り刻一刻の猶豫を許さざるを知り、卽刻健脚部隊を編成し大本隊長之を指揮し、胸突く峻嶮の酷い傾斜地を約十時間を費して午後四時頃阪田部隊に到達し、直ちに戰線に加はり突擊に參加し日沒頃遂に敵の陣地を突破して其一角を占領し萬歲を三唱し、續いて夜襲を決行して拂曉漸く敵を殲滅するを得たり。我軍の死傷又全員の半數に及び、往年日露役の旅順二〇三高地の激戰にも比すべき戰ひにして敵の死體無數、我軍刀により眞二つにされたる敵將校も多數あり。我軍は點々と續く敵の血痕を目標に山より山に追擊を實行し、八月二十四日夕刻遂に懷來の平地に進出せり。此間十四日間。

2.　佐々木部隊の肉彈突擊

八月二十一日八達嶺附近の山地戰にて、湯益溝の鋸山と名付けし切り立ちたる崖の上に陣地を占領しある敵百五、六十を攻擊するため佐々木部隊長は、僅かに部下數名と共に悠々迫らず巧に山肌の窪を縫ひ、まるで足がかりよりない絶

壁の間を匍ひつゝ敵陣地の眞下に辿り着き、將に一擧突入を決行せんとす。此時敵は此決死的肉彈突擊隊の眼下に潛行しあるを知らず、只我が主力部隊に向ひ盛んに迫擊砲や機關銃を發射するのみ、佐々木隊長は好機乘ずべしと自ら陣頭に立ちて突擊の一令に勇躍して突入す。

敵は全く豫期せざる事とて周章狼狽忽ち十四、五名は谷に眞逆樣に落ち込み、突擊隊は兵力少きも決死的の勇敢に優勢なる敵も遂に浮足立ち恐れをなして退却を始むるや、四周斷崖絶壁算を亂して互に先きを爭ひ混亂醜體を演じ、遂に百五十許りの敵は谷に陷り佐々木隊の爲殲滅せられたり。

佐々木隊長も敵の手榴彈の爲負傷し敵の陷ちたる谷に落ち込みしが全身血を浴びつゝはひ上り、最後迄頑張り負傷も忘れたるが如く部下を激勵して其任務を遂行せり。

3.　山中に孤立死守すること二週日能く責務を全うす

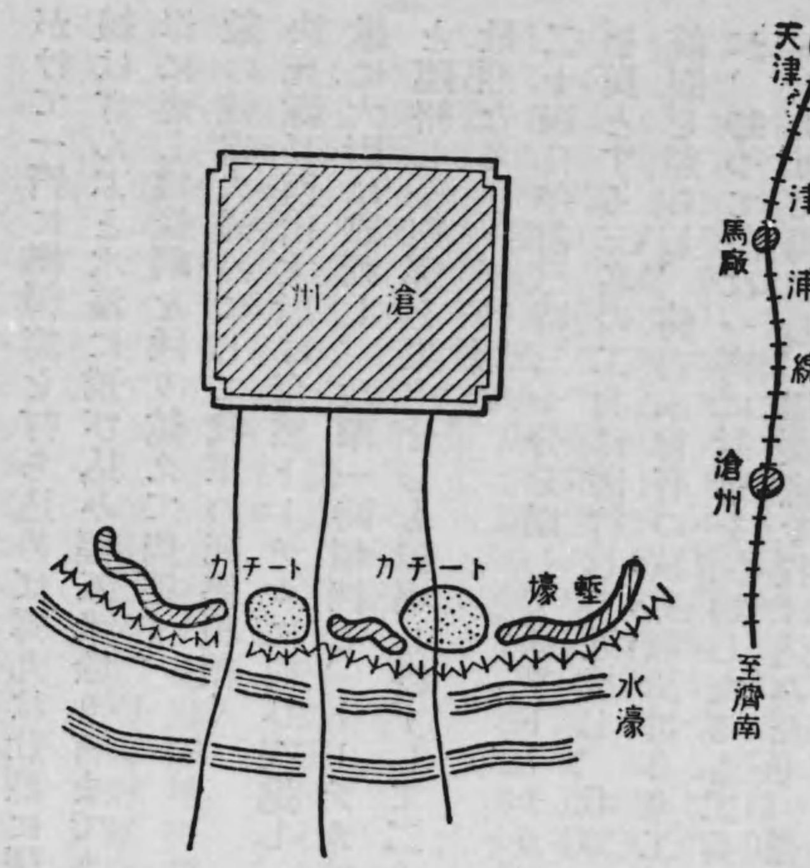
阪田部隊の一小部隊は夜陰に乘じ敵の間隙を利用して敵陣地の中央を突破し、其側背に出でしも友軍との連絡全く絶え、大部隊の敵に包圍せられ無電は豪雨

の爲用をなさず僅かに鳩により救援を求めたるも何等の音信なく、爾來山上に立籠り連日雨と寒冷に惱まされ敵の奇襲を警戒しつゝ、日々生米一合を嚙り二日に乾麵麭一袋を舐めるやうにして水無く雨水を鐵兜に受けて其渴を潤ほし岩上に起居し八日目より彈丸盡き敵の猛射を岩蔭に避けつゝ敵近接し來らば石や木根を投げて應戰す。小數部隊と雖も決死奮鬪は敵も前後十數回攻擊し來りしも、白兵と石合戰にて擊退し、頑張り通すこと實に十四日間。全く食なく我友軍來援せし時は思はず歡呼の聲を擧げ名譽の犧牲者に感謝して、遂に敵の中央據點たる要地を死守し我攻擊を容易ならしめたり。

四

滄州戰に於ける「トーチカ」攻略の一戰例

滄州城は津浦線上に在る敵の軍需集積要地として縣城を中心に東西實に七十キロ深さ十二キロ、然も低地は大部分運河を氾濫せしめて水浸しとなし、殘されたる僅か三、四個所の通路に二ヶ年の日子を費し數萬の苦力を動員し、某外國人の指導の下にペトン式要塞を築き上げ五萬の兵より決死隊を選拔して死守せしめた者である。



我軍攻擊情況

軍の攻擊正面は至る處氾濫と水濠の爲、已むを得ず最も堅固に守備しある眞正面を突破するより外に策す術なく、長野部隊は隊長以下決死の覺悟を以て九月二十一日夜陰を利用して高粱生ひ茂る畑を靜肅なる接敵隊形にて敵陣に近接し、時々月明に照され敵の集中火を受けつゝ拂曉迄に敵陣地前の水濠に達し、突擊準備のため先づトーチカの銃眼目

がけて一齊に擲彈筒を打ち込めば彈丸は壯烈に爆烈す。此瞬間突擊第一波の第一線はざんぶと水濠に飛び込み幅五米餘り首まである水深を銃劍を高く揚げつゝ敵岸に達し鐵條網を跳り越えて肉迫す。

敵の銃砲火熾烈にして我軍の死傷相續く。

決死隊長西山大尉は奮然トーチカに向ひ突進し、敵の將校以下多數を斬殺せしも遂に大尉は戰死し、攻擊一時頓挫し、トーチカは容易に陷落せず。直ちに我砲兵と連絡し全砲彈を集中せしも破壞し得ずして二十三日は日沒となる。

壯烈なるトーチカ爆破

二十四日午前三時三十分を期して斷乎トーチカを爆破するに決し、吉武工兵少尉を長とする三名の工兵は潛行して近接し、我軍のヘツドライトによりトーチカの銃眼を照らし、前古未曾有の眩惑戰法により工兵爆破隊の行動を援助せんとせしが、却つて敵は一齊に射擊を開始したるも工兵は二手に分れ一、二、三の號令でトーチカに肉迫し、爆藥罐を投げ込みたり、轟然たる大音響は月下に敵のトーチカが鐵筋の舞ひ上り三十人程の敵が空中に吹き飛ばさるる壯觀を呈す。

工兵上等兵は成功を歩兵隊に知らすと共に、直に後方掩護のトーチカに躍り込まんとして敵彈に斃れた。之を見た長野部隊は即刻突擊し、道田少尉は第二トーチカのドアに突入してピストルを亂射しつゝこれ又斃れて壯烈なる戰死を遂げたるも、破壞されたる後方のドアから我銃劍の突入にて六疊敷位のトーチカ内部にて白兵戰を演じ、至る所敵味方の伏屍に埋まり遂に全陣地は陷落したのである。

トーチカ内部には廣い床が敵の藥莢で埋まり何萬發發射したかわからぬ程で鐵筋の防壁は飴の如く曲れり。

五

一、上海蘇州河の强行渡河の決死戰

十月三十一日我石井、鷹森、田上三部隊は壯烈なる敵前渡河を決行し蘇州河畔の頑强なる敵陣地を突破せり。

此日午前十時半淺田砲兵隊は全砲火を敵陣地に集注し、殊に敵の防禦據點たる中新紡の鐵筋コンクリート五階建に對し榴彈射擊を行ひ、茲に我蘇州河强行渡河の決戰は開始せられたり。

敵も我企圖を察知するや十五サンチ榴彈砲、野砲、迫擊砲、歩兵砲等あらゆる火

砲を以て應戰し今や戰場は白、黑雲漠々濛々として天地を震動し愈、激戰の幕は切つて落さる。

豫め準備しある輕渡河橋は各〻工兵隊に依りて河岸近く配置され、突擊部隊は輕裝して其直後に滿を持して命令一下を待つ。

正午我砲擊の中止と共に架橋隊は直ちに輕渡河橋を水中に敵彈雨飛の裡に眞裸となり飛入りて作業を開始し辛うじて敵岸に達せんとす

るや、我大島部隊長は先頭に軍刀を振りかざしつゝ歩兵の突進を開始す。之と同時に水中發煙筒は盛に投入せられ、附近一帶白煙濛々として敵眼を覆ひ此瞬間を利用して續々彼岸に達す。

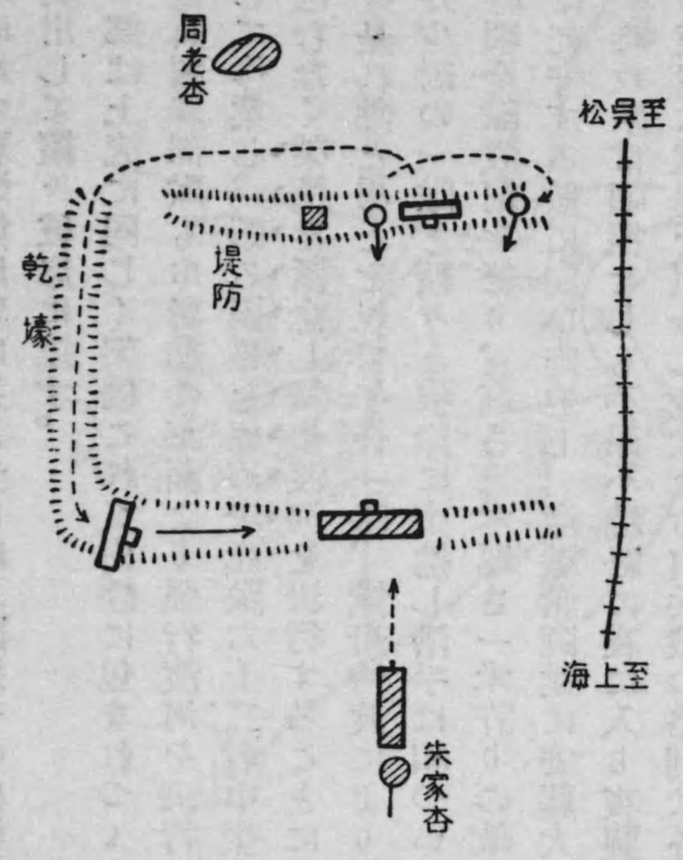
一部は上流に同じく架橋これ又白煙に包まれつゝ突進す。

他面鷹森部隊も申新紡の正面より强行渡河を決行し架橋工兵隊は敵火の猛射を冒して作業し、頗る困難を極め決死隊六十二名中生き殘るもの僅に十數名となり、已むなく架橋を斷念し鐵舟渡河を決行することに定め、各勇敢無比の我勇士は總身是れ熱と勇とを以て午後一時、鐵舟漕渡により第一回安藤大尉の一隊、次は今井少尉の一隊と續々と彼岸に突進し漕手は相ついで斃るるも屈せず、遂に午後四時頃全隊渡河を終り、高さ三米厚さ一米許りの敵陣地のコンクリー壁に據り頑强に死守する敵に向ひ肉迫し、激戰奮鬪遂に安藤大尉は斃れ、部下又相ついで傷き一時攻擊は頓挫せしも不屈不撓終に夜に入り夜襲を決行し、焰々と燃え上る附近の家屋は戰場を照らし悲壯なる白兵戰の格鬪は各所に演ぜられて、遂に一帶の敵陣地帶は攻略せられたり。

六　將校斥候巧に戰鬪し優勢なる敵を擊滅したる戰例

一、昭和七年二月十三日（前上海戰）千代島將校斥候は江灣鎭方向の敵情搜索の爲派遣せらる。兵力（輕機一、小銃一分隊十四名）

斥候は當日風雨雪を冒しつゝ南下し、數ケ村を搜索せしも得る所なし。依つて更に急行南下し午前十一時頃周老杏へ達し晝食を喫しある時、斥候長は南方を視察するに朱家杏方向より敵歩兵七、八十北進中なるを發見直ちに部下に戰鬪準備を命じ、屈身匍匐して堤防に



取りつき遮蔽して敵を待つ。

敵部隊は何等の警戒なく前進し約百五十米許りに近接するや斥候長は俄然射擊を命じ忽ち六、七名殪る敵は頗る狼狽し乾壕に據り應戰す。

交戰二十分斥候長は輕機分隊に敵の左翼に進出して射擊すべきを命ぜしも容易に進出せず、斥候長現場に至り見るに敵彈雨下し意の如く移動し得ざるを知り、自ら傳令以下八名を率ゐ圖の如く乾壕にかくれつゝ敵の左側に進出し側射を開始す。敵は忽ち死傷續出し遂に死體三十二、俘虜一、自動小銃二、拳銃二、小銃二十五、彈藥四千餘發を遺棄し潰走せり。

第二十章 軍隊符號

大本營
總軍司令部
方面軍司令部
軍司令部
軍團司令部
師團司令部
機關銃(M.G)
輕機關銃(L.M.G)
輕迫擊砲(L.M)
重迫擊砲(S.M)
擲彈筒
戰車

歩兵(i)

旅團司令部
聯隊本部
大隊本部
集合隊形
行軍隊形
大隊密集隊形
中隊密集隊形
疎開セル歩兵中隊
大隊砲
聯隊砲
機關砲

對戰車砲
平射歩兵砲
曲射歩兵砲
歩兵通信班
火線
單獨兵

騎兵(K)

旅團司令部
聯隊本部
乘馬散開隊形
集合隊形
行軍隊形
聯隊密集隊形

中隊密集隊形
徒歩散兵
徒歩部隊
手馬
通信班(K.T.L)
單獨兵

野戰砲兵

S.t 野砲兵
S.A 騎砲兵
B.A 山砲兵
K.A 重砲兵
A 段列重

重砲兵旅團司令部
野砲兵聯隊本部
野砲兵大隊本部
野砲兵放列
野砲兵段列ノ隊形
觀測班（小隊）
聯隊
大隊
中隊
觀測所

騎砲、山砲、重砲兵ニアリテハ
代フルニ以テス尚
榴彈砲加農ニハ以テス

工兵（P）

聯隊本部
集合密集隊形
行軍隊形
其他歩兵ニ準ズ

通信照明

野戰電信隊
通信隊
電信通信所
電話通信所
電話機

無線電信隊
移動無線電信所
固定無線電信所
鳩隊（P.T）
鳩舍
鳩哨

航空隊（F）

飛行聯隊本部
飛行大隊本部
飛行隊集合隊形
氣球隊本部
氣球隊
氣球昇騰位置

對空監視哨
高射機關銃
野戰高射砲隊（AA）
高射砲陣地
探照燈

行李輜重

小行李
大行李
架橋材料中隊
輜重兵聯隊本部
野戰病院（F. L）

馬廠(P.D)
衛生隊(S)
隊繃帶所
裝甲自動車隊
騎兵裝甲自動車
自動車隊

警戒宿營

小哨或ハ前哨中隊
下士官哨
單哨或ハ複哨

下士官斥候
展望哨
警急集合場
警急大集合場
飲馬場
馬繋場
車廠
砲廠
機關銃廠

作業

輕機關銃座
重機關銃座
輕迫擊砲座
重迫擊砲座
野戰砲兵掩體
鐵條網
鹿砦
地雷
橋梁ノ破壞
偽工事

瓦斯隊

瓦斯掛將校
瓦斯掛下士官
瓦斯掛兵

隊標略字

A 軍司令部
C 軍團司令部
D 師團司令部
Bs 混成旅團
B 旅團

R 聯隊
b 大隊

隊號指號

1. 聯隊內ノ大隊號ニ限リ羅馬數字ヲ用ヒ其他ノ部隊ニハ亞刺比亞數字ヲ用フ
2. 部隊又ハ銃砲數等ヲ示スニハ數字ニ括弧ヲ附スルモノトス

例

II/2i	第二歩兵聯隊
2/2K	第二騎兵聯隊
3/14A	第三十四砲兵聯隊
1/2P	第一工兵聯隊
1/3 2	第一小二中隊
1/16 2K	一分騎兵第二中隊
(4)	機關銃四銃

但シ軍隊符號ヲ用フルトキハ兵種ヲ示ス洋字略符ヲ省クモノトス

例

≅1/2	第一裝工兵聯隊

昭和十三年六月二十日印刷
昭和十三年六月二十五日發行

歩兵初級幹部指揮必携奥附
定價 金八拾錢

著者 舟橋茂 東京市麹町區三番町十四番地
發行兼印刷者 横尾民藏 東京市牛込區市谷臺町二十二番地
印刷所 成武堂印刷所 電話四谷(35)五七三九番

發行所 成武堂 東京市麹町區三番町十四番地
電話九段(33)二八一五番
振替東京三〇七一三番

不許複製